
世界に嫌われた女の子

chemical

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界に嫌われた女の子

【Nコード】

N5255Z

【作者名】

chemical

【あらすじ】

ハルがふつとばされた世界で出会ったのは、神と皇帝。女嫌いの皇帝と人を信じきれない少女のはた迷惑な恋物語。（リハビリのために、サイトにあるお話を少しずつ改訂していくことにしました。タイトルは同じですが、少しずつ内容は変わっていくと思われます。全部改訂しなおしたら、サイトに戻します。土日以外1日1回更新したいです。）

1（前書き）

不意に流血や痛いお話がありますのでご注意ください。
この改訂が終わったら、サイトを通常運転に戻したいです・・・

晴は不思議な子であった。

晴自身は当り前の事だと感じていたのだが。

周りの人には分からないものが、彼女には見え、聞こえ、触れられた。

けれど、晴はいつからか

自身に見えたこと、体験したことをあまり口に出してはいけなかったということも学んでいた。

それは、彼女の母親がいたからだ。

母親は精神的に弱っていた。

晴の言動一つ一つにひどく過敏に反応し、良いとは言えない反応を示す。

晴は子供の動物的な本能で感じ取っていた。

物心ついた時には彼女の母はすでにそういった精神状態であったし時折、気まぐれのように示される愛情も

言葉の暴力を投げかけるときでさえも晴にとっては母という存在以外の何者でもなかった。

母のその状態は彼女が生まれる少し前に他界した父親の事故のせいでもあったかもしれないが、

彼女もまた敏い人であったから晴の異常さに怯えていたのかもしれない。

母親は晴の不思議な言動を子供の言うことだから、と受け流すことをせず

罵りに変えて吐き出していった。

まだ、言葉の暴力だけだっただけ、まだだと思うかもしれない。

晴自身は、幼すぎてそのころの生活を思い出すことも難しいが

母と子、2人の生活の中で、大きな影響をもつ存在からの否定は

彼女を内向的にするには十分だった。

内向的になった彼女を、支えてくれたのは母ではなく、人でもなかった。

そうして、その交流を母に知られることでまた母の精神も削られていった。

悪循環というのだろうか。

繰り返される言葉の暴力と堂々巡りに晴は黙って耐えることしかできず、

彼女は母親の前であまり喋らず、行動しない子になっていった。

だが、晴には逃げ場所ができた。

それは、彼女にとってとても幸運なことであつたといえるだろう。

子供というものには考え方、感じ方の見本が必要であり、一番の身近な手本が保護者だ。

それをなくしては精神の成育はうまく成り立たない。

晴にもそれは例外ではなく、事実その状態のままであれば

彼女の今の状態はなかっただろうと容易に想像がつくというものだ。彼女が世間一般的に見ていい子に育つたのは彼女の母方の祖父母のおかげに他ならない。

彼らは、年に一度は顔を見せに来ていた孫と娘が訪ねてこないことに疑問を抱き

母親と晴を訪ねた時、彼らはその異常に敏く気が付いた。

それだけではなく、彼らは彼女の母親が精神的に弱っている状態にあるということや

母の晴への接し方を知ったときに素早い対応をしたのだ。

もしかしたら、祖父母も薄々自分たちの娘の精神状態を疑っていたのかもしれない。

彼らは世間や周りの目を気にすることなく

母親を病院に無理矢理入院させ、晴を自分たちが住んでいる田舎へと引き取ったのだった。

祖父母に連れられて田舎へと行つた晴は

その小さな目に、収まりきらない世界を見た。

怯えた小動物のようなビクつきは消え、青白かった頬には赤みがさし子供らしい柔軟性と順応性で欠けていた様々なものを取り戻したよ

うに見えた。

彼女の顔には表情が戻り、毎日近くの野山を駆け回ることを楽しみにする普通の子供になっていった。

彼女自身の周りには相変わらず、不思議な出来事が多かったが田舎特有の空気と、風土に紛れ込む程度のことだった。

けれども、晴は不思議なことは祖父母の前でしか語らなくなっていた。

幼かったとはいえ、母親の怯えや嫌悪の表情からそういった事柄を忌むべきことと認識していたからだろう。

他の人間には友人であつたとしても曖昧に誤魔化していたが一緒に生活を営んでいる祖父母にはさすがに通用しなかった。

初めのころは、祖父母に対しても怯えながら話していたが

母親の代わりに彼女を愛しんでくれていた祖父母は、晴の話を聞いても母のような反応は一切見せず。

笑って頷いてくれたり、ときには真剣な顔で注意を促したりした。

祖父母は晴がほかの子と違うことに恐怖は覚えていないようだった。いや、本当は彼らも晴に恐怖を覚えていたかもしれない、

ただ、その感情を決して晴には悟らせないようにしていたのかもしれない。

祖父母は、普通の子と同じようにやってはいけないこと、危ないと思われるようなことは

晴に厳しく言い含めたし、他の子らと同じように叱りつけた。

晴が不思議なことを体験した時は

幼い子供は神様の子だからね。と、優しく頭をなでてくれていた。

それは一度壊されかけた晴の世界を壊さないものであり、とても居心地が良かった。

そんな日々が続いていたのに。
晴の7歳の誕生日にひとつの悲劇が彼女を襲った。

その場所に決しているはずがない彼女の母親が、彼女の前に現われたのだ。

精神的に弱っている彼女の母親は祖父母の手配した病院に入院しているはずで、

その病院はここからとても離れているというのに、
母親はそこにいた。

入院患者の着ているような服ではなく、以前見ていた普段の服装のまままで

庭先に立つ彼女は、晴を見つけてゆっくりと微笑んだ。

そのとき祖父母は、晴の誕生日の御馳走のために1時間かけて隣の市の大きいスーパーに行くと言った。

祖父母の帰りを楽しみに待ちつつ庭で遊んでいた晴の目の前に立つた母親。

その世間的にとっても美しい部類に入るその顔は、別れた時と比べると変わっていなかった。

晴のものは違い黒曜石のような髪と瞳をもつ彼女が、
静かにたたえた微笑みは、見る者に優しさを感じさせるには十分だった。

「晴」

呼びかけられたその声に、晴は思わず母親に飛びついていた。

足がもつれるような勢いであつたが、母はしっかりと晴を抱きしめてくれた。

いくら傷つけられたとしても、いくら罵倒されようとも

彼女は晴の母親であり晴の大好きな人なのだ。

物心ついてから晴が知る母は、時折気まぐれに愛情のようなものを示す人だったが

そんな偏った情を与えてくれる彼女でも、母親という晴の狭い世界

の中心だった。

そんな彼女が、笑顔で腕を広げ

晴を包み込むように抱きしめてくれたことは

その時の晴には誕生日よりもうれしいことであつた。

母親には1年ほどあつてはいなかったが、

こんな微笑みで晴を呼ぶ彼女はもう、弱っていた精神が回復し

退院してきたのかと思わせるほどで。

「おかあさん！おかあさん！・・・」

泣きながらしがみついてくる我が子をやさしく抱きしめながら、

縁側から彼女は娘を家の中へと誘導する。

その顔には変わらず、微笑みを浮かべたままで。

「晴、ずいぶん大きくなったのね・・・」

頭をなでながら優しく、泣きじゃくる娘に語りかける。

一瞬、声の中に暗いものが奔つたことに

泣いていた晴は気がつかなかった。

けれど、それきり何も言わない母親に

晴は顔をあげ、母親を見上げた。

涙でかすんでいたが彼女の母親はさつきと同じ微笑みのまま。

そこで、晴は妙な違和感に取りつかれた。

こんな顔を母親は一度でも見せたことがあつただろうか。

時折見せてくれた愛情の中、こんなに手放しの微笑みはあつただろうか。

母親はいつも、少し怯えが見える顔で

それでも精一杯微笑んで晴を見つめてはいなかったか。

張り付いたように動かない母親の顔を、晴は思わずじっと見つめてしまっていた。

変わらない。優しい笑顔。晴が見たことがないくらいの。

変わらない表情に、どこからだろうか

晴の中に恐怖がぼつりと広がった。

晴は染みのように広がる本能のままに、母親から後退る。

畳で、晴の膝が少し痛いくらいに擦れてしまったが
それを気にする余裕はなかった。

母親は変わらない微笑みで彼女を見る。

「どうしたの・・・？」

微笑みは変わらない。

変わらない。

変わらない。

「やだっ！」

晴は怖くなって逃げ出そうとした。何が、とかなんてとか、理由は
分からなかったけれど
とにかく逃げることしか考えられなかった。

恐怖に背を押されるように部屋を飛び出そうとして後ろを向いた彼
女の首に細い、
ひものようなものがしゅるりと巻かれる。

それが何かを確認する間もないまま、ものすごい力で絞められた。

「な・・・」

疑問を声に出そうとしても首が絞められているために声にならない。

だが、苦しそうな晴をみながら母親は静かに言った。

彼女の首を絞める動作には何の躊躇もないまま力を込めて。

「大きくなるからよ。晴が、私のちいさな子のままでいないから。
こうやって、もう一度晴は小さくなるの、小さくなって

あのころに戻ってもう一度3人でやり直しましょうね」

精神が病んでいるからか、晴にも理解できない。

言葉の意味を考える間もなく、晴の意識は闇に落ちた。

晴の中を駆け巡ったのは、母親に対しての疑問や怒りではなく
生きることへの欲求

ただ、死にたくなかった。

次に目が覚めたとき、彼女は無機質な白が囲む部屋にいた。

そこには祖父母が泣きながら彼女が目覚めるのを待っていて
晴の名前をずっと呼びながら、よかった、ごめんね、しなくてよ
かった。

そう何度も何度もかけられる声と彼らの涙に
彼女の記憶にあることが現実起こったことなのだと実感させられ、
それが悲しくて晴は思い切り泣いた。

悲しいのは、母親にそこまで嫌われていた事実だった。

なんとなく、自分が生きているからには母親は死んだのだろう。

と妙な確信が彼女のなかにはあった。

受け入れたくない記憶を、無理やり認めさせるかのような祖父母の
泣き声に

晴は、その記憶から逃避することもできず

ただ、本当にあつたこととして刻みつけられたのだった。

大分大きくなってからだったが、祖父母に教えてもらったことによ

ると、

母親は欄間にロープをかけて首をつっていたらしい。

そばには彼女の字で“晴をあたしから守って”という走り書きのメモも見つかった。

晴は自分では首を絞められてずっと気絶していた

と思っていたのだが、祖父母の話によると醜く変わった母親のそばでぼんやりと母親を見上げていたらしい。

祖父母が声をかけると、けいれんを起こして倒れ、そのままあの病院に担ぎ込まれたということだった。

医師が晴を診察して初めて、首にひもが巻かれ尋常でない圧力で絞められた事実が明らかになったという。

いくつかの組織はひどく傷ついていたが運良く重要な器官や声帯に損傷は見られず

絞痕に比べると医師も首をかしげるほどの軽傷だったらしい。

その後も、なんだかんだと問題はあったものの、晴は順調に成長していった。

ただ、なぜか人よりもとても成長が遅かった。

小学校6年生でも3年生ほどに見えたり、中学生になっても小学生と間違えられる容姿のままだった。

だが、そのことで彼女がいじめられたりすることはなかった。

からかわれることはよくあったが、彼女は事実を否定はしなかったし逆に言い返すこともしていた。

ひとえに彼女が、小柄ながら運動神経が抜群によく

小学生のころから誰一人彼女に喧嘩で勝てる者がいなかったということも

いじめられなかった理由の一つだろう。

広くて狭い田舎では、晴の祖父母が有名なサーカス出身ということ

が知れ渡っていたため、

彼女の運動神経を誰も不思議には思わなかった。

上級生も、彼女には一目置いていたし、

何より頭の回転が速く運動が抜群という彼女自身が

人に嫌われるような性格ではなかったという所が大きいだろう。

もしかしたら、知らず知らずのうちに頻繁に彼女の周りで起こる出来事によって、

周りの人間たちの同情を得ていたのかもしれない。

少なくとも晴はそう思っていた。

それなりに、晴は幸せな生活を送っていたが、14歳の時に彼女の祖父が突然他界した。

高齢であったのもそうだが、不幸な事故だった。

おしどり夫婦と評判高かった祖母も、祖父の他界から体調を崩し、晴が15歳の時に亡くなった。最後まで晴を気にかけてくれていた。早過ぎる、二人の死はとても悲しかったが

周りの助けと、祖父母の遺してくれた

これから生活していくのには困らないだけの遺産、

生命保険によるお金、更にはよく知る弁護士のおじさんが後見人になってくれるという、

祖父母の温かい庇護は祖父母がいなくなっても晴を守ってくれていた。

そうして16歳になった晴は祖父母の家で一人暮らしながら高校生を送っている。

「いつてきます」

写真の中の祖父母にいつものように挨拶をして、彼女は学校に行くために家を出る。

なぜだろうか、彼女の親しい人たちはたとえ生身の姿ではなくなっただとしても

彼女の前に姿を現すことがなかった。

常ならざるモノたちを見、交流することができず晴の不思議も依然として幼いころのまま残っているというのに。

もしかしたら、姿を現すことで晴があちら側に飛び込むとも考えているのかもしれない。

それもいいかもしれないと、本当に時々考えてしまう。

庭の隅でさわさわとうごめくモノたちに恐怖を感じることもなく、逆に親近感さえわいてしまうのだから。

そんなことを考えながら、晴は門の脇に寄せていた自転車に鞆を降りこみ

田舎の一本道を自転車で駅まで向かった。

その駅から4つはなれた駅の近くに晴の通う高校があるのだ。

途中、朝からだだっ広い畑で農作業中の近所のおばさんたちと会い、いつものように挨拶をする

一人のおばさんが手に持っていた籠の中から黒いこぶし大の物を投げてきた。

晴がそれを軽く片手で受け止めると、おばちゃんは笑った。

「晴ちゃん！いまから学校かい？おばちゃんの特製焼肉おにぎりだよ！もっていきな！」

「危ない人には気をつけるんだよ！」

「知らない人についていつちやいけないよ!!」

「ほら、ジューズも持って行きなさい」

晴に次々とおばちゃんたちから物が投げられる。さすがにするめいかは朝からちよつと重いけれど。

みんな、晴が幼いころからの近所さん達で

晴の祖父母が亡くなったときから、まるで親のように晴を怒り、心配してくれている人たちだった。

彼らは、晴に会うといつも食べ物を与える。

金銭的には困ってはいないのだが、そういった食べ物は晴にとってとても助かるものだった。

晴は、料理があまり得意ではないからだ。

何しろど田舎なのでコンビニも少ないし、

スーパーの惣菜も夕方の割引を狙っているご老人たちやおば様たちにかかれば

晴が学校から帰ってきたころには微妙なモノしか残っていない。

「ほら、あんまりばさつとしてると電車に遅れちゃうよ！」

くれぐれも、暗い路地には入らないようにね」

いつものようにお菓子やらジューズやらをもらって、

高校生な自分にはちよつと過保護すぎる言葉をもらってと、いつも通りの朝だった。

「ありがとう!! 行ってきます!!」

そう言つて、もらったもの達を鞆に急いで詰め込んだ。

腕の時計を見ると、少し急がなければならぬ時間になっている。

おばさんたちに笑顔で手を振ると、自転車に飛び乗り

そのまま黙々と自転車をこぐ。

朝の少し冷えた風が心地よく、通り抜けて行つた。

数分自転車をこぎ続けていると、田畑が少なくなり段々と車通りが多くなる。

駅前の繁華街が近づいてきたのだ。

繁華街といつても住民が買い物をする商店街と

全国チェーンのファストフード店が一軒あるだけのもの。

けれども国道はそれなりに交通量が多く、ちらほらと小学生が近所の小学校に登校している姿も見える。

国道沿いに駅へと向かっていた晴は、視界の端に黄色い帽子がぴよこんと動くのを見た。

無意識に眼で追ってしまった晴が次の瞬間に見たものは

目の前の国道に黄色い帽子を被った男の子が飛び出すところだった。
「あぶない!!」

叫んだが、自転車に乗ったままの晴の声は少年まで届かなかった。
物を落つことしたらしく、少年は下しか見ていない。

けれど、少年が飛び出した道にはトラックが迫っていた。

大きな音を鳴らすトラックに、少年は逃げるのではなくびくりと体を硬直させた。

とつさに晴は自転車から飛び降りて、走った。

「っ……!!」

間に合うかギリギリのところだ。

持前の運動神経で体勢を崩すことなく自転車から道路に着地し、男の子を抱き上げると同時に男の子を歩道側へと放りなげる。

いつも通っている道だから、勘でしかないが

確か少年を投げた方向にはゴミの山があつたはずだった。

なくても、トラックにぶつかるよりはましだろう。

だって、少年を抱えたまま反対車線に出ても別の車にひかれてしまう。

そこまでは頭と手が回ったのだが、

少年を投げた後自分がどうなるかなんて考えてなかった。

ブレーキ音、悲鳴、衝撃

奇妙な浮遊感。

晴が覚えているのはそこまでだった。

死にたくないな。

そう、ずっと昔と同じことを思った。

思えば結構悲惨な人生だったのかと思う。

自分としてはとても幸せだったのだけれど、客観的に見て自分は悲しい人生を

歩んできたのではないだろうか、不思議なものが見え、母親に殺されかけ、

祖父母は早く亡くなり、その他、周りの人たちから心配されるほど、いろんな事件に巻き込まれてきた。

そうして、自分は子供を助けてトラックにふつとばされる。

・・・考えても典型的とまではいかないが、悲惨な人生だ。

「あー、まあ本人が満足してるだけでいいかなあ」

お、声が出た。自分はてつきり死んだと思っていたのに。

「あ、死後の世界だから自分のどうとでもなるのかな？」

首をかしげる。実際生きているのならトラックにあたったからには少なくとも骨折や、怪我をしているはずで、その痛みがあるはずだけれども今、自分の体には全く痛みも傷もない。

と、ここまで考えて気がついた。

「ここどこ・・・？」

ほのかに白く明るい夢の中のような場所。

ここが死んだ人が来る場所なんだろうか？

てつきり、すぐに幽霊にでもなるかと思っていたのだが、

意外に、未練とかがなかったのだろうか。

「違うわよ。 ハル」

聞こえてきた声が、空間を切り裂いたように晴の耳に届いた。

「ここで会うのは久しぶりね。 まあ、もう元の世界には戻れないけ

ど」

傷の具合はどう？

とにこやかにほほ笑みながら、声と同じくいきなりその人は現れた。真っ黒な瞳と豊かにうねる髪を背中に流し、

白い布で挑戦的な体の覆い方をしている。ないすばでーのお姉さんだ。

ちなみに背中には真っ白な翼があった。

天使のような恰好のその人を見あげて
晴は、言葉を失った。

いきなりファンタジーな恰好をした天使っぽい人が現れたからではない、

その人が、日本でこんな恰好をしていたら捕まりそうだなと思ったからでもない

いきなり現れたその人の顔に、だ。

黒曜石のようにまっ黒な瞳と髪の毛

大きな目と少し厚めの唇。とても整ったその顔は

母親のものだった。

「あ・・・お・・・かあさ・・・？」

目の前の者は母親に瓜二つであった。

混乱する。

自分の頭がおかしくなったんじゃないだろうか。

ふいに、過去の網膜に焼きつけられた映像が、頭の中を掠める。

だってお母さんは・・・ゆれていなかっただろうか・・・？

忌まわしい記憶の中の映像に心臓と体の言うことが聞かなくなる。

耳元で、うるさいくらい心臓の音が聞こえた。

かは、と肺から小さく空気が漏れる。

息ができない。

息を吸おうとしているはずの肺が、筋肉が働きを止めたかのようなまるで昔の無声映画のように、目の前で切り替わる映像のことしか考えられない。

「ストップ。落ち着きなさい！ ハル」

突然の女の人の声に、どうしてか晴の思考がはつきりとクリアになった。

無声映画のような映像は瞬く間に視界から消え、緊張していた体が自由になる。

胸を押さえていた手も、制服も汗で湿っていた。

片手を床につけ、必死で酸素を肺に入れるため息を吸い込む。

息を整えながら、ここまで動揺してしまうものなのか、と頭の冷静な部分で考えた。

まだ、囚われている。

母親に。

息を整える晴の前に、母親と瓜二つの女性は膝をつく。

気配に、晴が顔をあげると

女性は晴の肩にそっと、まるで愛しむように手を触れた。

「正確に言えば、あたしはあなたの母親ではないわ。

母親のような存在ではあるし、そっくりなのも認めるけれど。

落ち着きなさい。あなたは死んでないわ」

もう一度、言い聞かすようにゆっくりと言われた言葉は案外すんと晴の心の中に落ちてきた。

「あなたは・・・だれですか？　ここは・・・？」

絞り出すように言った言葉は、震えているけれどきちんと声にすることができた。

何のひねりも芸もない言葉だが、一番知りたいのだからしょうがない。

晴の中に冷静さはいくらか戻ってきたようだった。

女の人は笑って晴と同じようにその場に座り込み晴の目をのぞきこんできた。

とても怖かったが

さっきの自分に負けなくなかったから、晴は無理やり目を合わせ続ける。

そこにあっただのは意志のはっきりとした黒い瞳。強い生命力にあふれた瞳だった。

そう、あの人はこんな目をしなかった。

あの人の目はいつも違つところを見ていて、覗くとどこか暗い処に引き込まれそうになる。

そんな瞳をしていた。

この人と、彼女は違うモノだと

感覚で理解すると、晴の中に落ち着きと冷静さが一気にすべて戻ってきた。

女の人の目がやさしくなる。

そこには彼女には無かった、晴への純粹な愛情があった。

祖父母の笑顔を思い出すような、そんな視線だった。

見ず知らずの彼女から、そんな感情を向けられることに少し混乱しつつ

晴は彼女が口を開くのを待った。

「ハル。ここはね、あなたがいた世界と違う神々が治める世界。あたしはその中の一人。リルヴァーナ。

あなたは元の世界では事故にあつて、いなくなったことになつてる」

言われていることは無茶苦茶なのに、どうしても真実だとわかつてしまう。

真実だと理解してしまうことがおかしいのかもしれないが、晴は、この人の言葉に嘘はないと信じてしまっている。

この人には、そうせざるを得ない圧力がある。

世界が違つとか、普通に考えてもおかしいことだ。

いくら、普通の人には見えないモノたちを見てきたとはいえ晴は疑り深いほうだ。

神はまだいい。日本にはそれこそ多くの神々がいて私もその存在を幼いころから疑つてはいない。

神と呼んでもいいのかわからないものたちも多くいるが神と呼ばれる存在はどことなくキラキラとしているのだ。

この女の人、リルヴァーナもそう。

時折目を細めてしまうほど、眩しい。

昔からの不思議現象のせいでこういう事態に慣れてしまったのか。どちらにしても一応は納得するしかないだろう。

今の晴が疑いを持って、あまり意味がない。

万が一夢の中だとしても、だれにも迷惑をかけていないのでセーフだ。

「私は、元の世界に戻りたいです」

戻れないとさっき聞いたような気がするが、聞いてみなくちゃ分からないだろう。

ここが夢であろうとどこだろうと、私が生まれた所はあそこなのだ

から。

私の言葉に、リルヴァーナは少し厳しい顔をしていった。

「あちらの世界の神々はあなたを手放すことに決めたわ。もう、戻れないの」

ごめんね、と

いつの間にか握られていた手を強くつかまれて泣きそうな顔で言われては、

根っこが馬鹿なくらいお人好しだといわれる晴に勝ち目はなかった。リルヴァーナが言った、晴を手放すとはどういうことなのだろうか。

「つまり、あつちの神様・・・？ 仏様とかキリストとかに私が嫌われたということですか？」

推測を言葉に出してみても、首をひねる。

神様に嫌われるって・・・なんか悪いことをしただろうか？

そんなに悪いことをした覚えはないはずんだけど・・・と、難しい表情で考える晴にリルヴァーナは焦っていった。

「嫌われたんじゃないの！むしろ好かれたからこっちにいるのよ！あのね・・・あつちの世界とあなたの相性はものすごく悪かったの。神々は何とか助けようとあなたを一度こっちに飛ばして相性の修正を図ったんだけど・・・」

結果は・・・運の悪さからもわかるとおり、ね。

だから、お気に入りのあなたを死なせたくないから、

相性のいいこっちの世界に泣く泣く手放すことに決めたのよ」

必死な言葉から嘘はないと感じられて、それはそれで悲しくなった。

神様に言われるくらい
やっぱり、私ものすごく運が悪かったんだ…。

そんな気はしていたが改めて言われるととても悲しくなってくる。
確かに、神様に嫌われているような気はしなかった。

助けようとしてくれるまで好かれていたのも知らなかったのだが。
けれども、神様に助けてもらっていたというのにあんな運の悪さだったのならば

確かに世界と相性が悪いというしかないだろう。
生きているだけましというものだ。

トラックに吹っ飛ばされて、いきなり変なところにきて
神様に会って、世界と相性が悪かった・・・ってどれだけ現実離れ
しているんだろうか。

今の状況が夢でも一向に構わないし、むしろそのほうが嬉しいのだが
こっそりつつねった頬は痛いし、脳味噌以外の感覚が現実だと示し
ている。

戻れないと言っていた。

元の世界に戻れないとなると、もう、友人にも近所の人たちにも会
えなくなるということだ。

脳が考えるのを拒否しているのか

ふわふわとした現実感のない、悲しさがどんどん膨らんできて、勝
手に涙まで出てきた。

「う・・・」

目の前がゆがむ。

頬を、温かいものが流れていく。

泣き始めた晴をリルヴァーナは優しく抱きしめて頭をなでてくれた。リルヴァーナのその手がまるで、お母さんのようで遠い遠い、昔の記憶が少し開いたのかもしれない。

悲しみだけではなく、既視感に後押しされて涙はどんどん流れていた。

泣き続ける晴にリルヴァーナは何も言わずにずっと頭をなで続けてくれる。

どれくらい泣いていたのかわからない。これから自分がどうなってしまうのか、どうやって生きていけばいいのか

全くわからないまま、晴はリルヴァーナの腕の中で泣きつかれて眠ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5255z/>

世界に嫌われた女の子

2011年12月17日21時49分発行